

ソグド系帰化人安吐根について  
 —— 西域帰化人研究 その3 ——

後 藤 勝

**The Historical Record of An Tu-Gen (安吐根)**  
 —— Sogdian Immigrants in China ——  
**Masaru Goto**

**Summary**

Several historians have written their articles about activities of An Tu-Gen (安吐根) and the author have also discussed some of his activities in the former papers<sup>(1)</sup>.

Through those works, we could recognized various profiles of personal history of him. For example, he was a merchant who was of Sogdiana birth, and came from Bokhara, Uzbek, to China, and immigrated in Jiusuan (酒泉), a small commercial town in north-western frontier district.

In this paper the author will try to add more a few knowledge of him through analysis of the materials concerning his activities in China and Mongolia, such as literatures like An Tu-Gen's biography in Bei Shi (北史) and other fragmental records of his affairs.

Received May. 14, 1988

Key word : An Tu-Gen (安吐根)

安吐根については魏書には伝がなく、北史卷92恩倖伝の中の和士開伝に附伝としてその名が見える。極めて短いものであるが、その生涯は、およそ六つの時期に区分できるように思う。以下これに従って足跡を辿ることとする。

### 1. 酒 泉 時 代

附伝は次のように述べている。

安吐根は安息の人なり。曾祖，魏に入り，酒泉に家す。

すなわち，ソグド系商人として東西交易に従事していた関係から，それに深い関係のある商業都市酒泉に三代前に移住し，帰化することとなった。従って，吐根はこの地で安氏四世として生まれたことになり，当然中国の習俗や事情にも通じていたと思われる。

さらにまた、当時洛陽や河西の各都市には数多くの西域人が商胡として来住していた<sup>(2)</sup>のであるが、その中から特に北魏王朝に選ばれて、蠕々<sup>(3)</sup>に対する外交使節にされたのであるから、彼の家は帰化商胡の中でも有数の家であったと思われる。ともあれ、彼は酒泉に生まれ、柔然遣使まで、おそらく20年前後をこの地で過ごしたのであろう。

## 2. 蠕々在留と最初の北魏遣使

これについては附伝は次のように述べている

吐根、魏末に充てられて蠕蠕に使す。因りて塞北に留まる。天平の初（534）、蠕蠕の主（阿那瓌）の使、晋陽に至る。吐根、密かに本蕃の情状を啓す。神武（高歡）之が備を為すを得たり。蠕蠕果して兵を遣わして入掠するも獲ること無くして反る。神武 其の忠欵なるを以て厚く賞賚を加う。其の後、蠕蠕と和親し、婚媾を結成す。皆、吐根、行人為り。

帰化した西域人が、中国王朝の外交使節として遊牧胡族国家に遣使されることは珍しくなく<sup>(4)</sup>また遊牧国家の使節として、かれらが中国に来朝することもその例少なしとしない<sup>(5)</sup>。それは、かれらが多年にわたる商業活動を通じて蓄積してきたユーラシア大陸の諸情勢についての豊かな知識や情報、さらには語学力等が高く評価されたからである。あるいはさらに、かれらは商人集団として各地に植民していたのであるから、こうした機会を利用して通商範囲を塞北にまで拡大する絶好の機会として利用したということも考えられよう。

ところで吐根の蠕々遣使の年についてであるが、これについては、「魏末」とだけあって明確な時期は示されていない。しかし、それに続いて彼の最初の入朝を天平初年即ち534年と書いているところから判断するに、534年を遡ること1～2年と見てよいであろう。

さらに吐根は何故に蠕々に留ることになったのか。このことについては、北史巻98蠕蠕伝の次の一節が解明の手掛りを与えてくれる。

始め阿那瓌、初めて其の國を復するや（521）、禮を朝廷に盡くす。明帝（515～'28）の後、中原喪亂し、未だ外略を能くせず。阿那瓌、北方を統率し、頗る強盛と爲る。稍く敢て驕大となり、禮敬頗る闕く。遣使朝貢するに復た臣を稱せず。天平以来、逾々自ら踞慢たり。汝陽王暹の秦州爲るや、其の典籤齊人淳于覃を遣わして阿那瓌に使せしむ。遂に之を留め、親寵して事に任せしむ。阿那瓌、洛陽に入るに因り、心に中國を慕い、官號を立て僭かに王者に擬し、遂に侍中・黄門の属有り。覃を以て秘書監・黄門郎と爲し、其の文墨を掌らしむ。覃、阿那瓌をして轉た不遜に至らしめ、國書を奉ずる毎に隣敵抗禮す。

まず阿那瓌の動きであるが、彼は520年自立して可汗を称したが、族兄示発に追われて北魏に亡命し、一族・部民とともに洛陽の燕然館の客となった<sup>(6)</sup>。北方の安定を願っていた北魏は、彼を鄭重に遇し、北帰の時期を伺った。彼自身、蠕々国内の不安定を懸念して北帰を逡巡していたが、孝明帝は莫大な贈物と強大な護衛の兵力をつけて翌521年彼を帰還させた<sup>(7)</sup>。その後数年、しだいに勢力を確立し、時に北魏の内乱に助力を申し出るなどのこともあったが<sup>(8)</sup>、対魏姿勢はしだいに尊大となり、528年には孝莊帝も阿那瓌に詔して「讚拜に名をいわず、上書に臣を稱する必要なし」<sup>(9)</sup>との待遇を与えるまでに

なった。かくして蠕々国内に確固たる地位を打ち立てるために北魏亡命中に見聞したところを範として支配機構の改造整備に踏み切ったのである。そのためには行政事務に堪能な中国人登用の必要を感じ、淳于覃を抑留することになったのであろう。覃の遣使に遅れること2～3年の吐根は、覃に比べると、商胡として北魏のみならず西域諸国の事情にも通じていたから、奇貨居くべしとして抑留された可能性がいっそう高い。

なお、引用文にある534年ごろ、蠕々が侵寇したが、吐根の忠告により、高歓が予め備えるところがあってこれを無事撃退したという事実は、本紀・蠕蠕伝にも見当たらない。

さて、蠕々における吐根の役職はどのようなものであったか。淳于覃の場合は、文墨を司ると一応明記されているから、さしあたり中国ならば中書系の役職であろうが、かれの場合は、北齊との外交使節としての行動が中心となっており、公主の交換等を通じて両国の友好関係樹立に極めて重要な役割をはたしたことが分る。附伝の記載には、若干の出入あり、具体的な記述に欠ける憾みがあるので魏書及び北史蠕蠕伝等の記載により、今少しく具体的に事実を辿ることとしたい。

太昌元年(532)月、阿那瓌は、烏句蘭の樹什杖を遣わして朝貢し、長男のために公主を尚りたいと申し出た。そこで永熙2年(533)4月、孝武帝は詔して范陽王誨之の長女である琅邪公主を降嫁せしめることにした。しかし、このころ北魏の政情は不安定で分裂寸前まで来ており、帝は大丞相高歓と対立して洛陽を脱出し、長安に拠る関西大都督宇文泰の下に身をよせることになって、公主降嫁は一時、中断せざるをえないことになったのである<sup>(10)</sup>。

そして、この年を以て、今までの北魏対蠕々の二国間関係は、東魏・西魏・蠕々の三国間関係に変わり、東西両魏はお互いの対抗関係から、蠕々を自己陣営に引き入れようとしてはげしく争うことになった。いいかえると蠕々(阿那瓌)は、対中国関係において今までよりはるかに、有利な立場に立ちうることとなり、それだけ両国とも蠕々対策には今まで以上<sup>(11)</sup>に神経を使わねばならなくなったのである。

534年以後における公主降嫁は、西魏が東魏に一步先んずることになった<sup>(12)</sup>。538年西魏の文帝は、元翌(孝武帝の舎人)の女を化政公主として阿那瓌の兄弟の塔寒(tarkan?)に妻せ、また文帝自ら阿那瓌の女を入れて后とする(後の悼皇后)<sup>(13)</sup>など積極的な姿勢を示したので、阿那瓌は滞在中の東魏の使者元整を抑留して回答すら寄せなかった。のみならず、同年范陽(幽州)・秀容(山西)に侵入し、元整を殺すなどの暴挙を敢てした。そこで東魏も蠕々の使者温豆伐らを囚えたが、高歓は阿那瓌の奸智を考えて使者竜无駒を帰らせて元整の存命を報告させるなど、あくまで自重してその懐柔に努めた。興和2年(540)阿那瓌は再び竜无駒をして朝貢させたが、たまたまこの時、文帝の悼皇后が病死したので<sup>(14)</sup>、東魏はこの機を逃さず、蠕々に積極的に策動を開始した。相府功曹参軍張徴纂を遣わし、阿那瓌に次のように伝えた。

- 1 西魏の文帝(当時は丞相宇文泰)は孝武帝を殺したが、同じく悼后を殺害した。
- 2 西魏から蠕々に降嫁したのは、実は公主ではなく、宗室の中でも疎族に属する者の女を公主と偽ったものである。
- 3 阿那瓌が、魏からうけた旧恩を思い、和睦に心がけるなら、東魏は真正の公主を送るし、国内

の叛臣討伐にも兵力を貸す用意がある。

阿那瓌は諸大臣と協議の結果、再び東魏に忠誠を尽くすことを誓い、莫縁・游大力を遣わして朝貢し、わが子奄羅辰のために婚を請うた。東魏はこれを受けて大府卿羅念・中書舍人穆景相を送った。8月阿那瓌は重ねて去折豆・渾十升らを使者として朝貢して婚を求めてきたので、高歓は、常山王隲の妹楽安公主を蘭陵郡長公主に封じた。翌年(541)4月阿那瓌は重ねて使者を遣わし、馬1000匹を聘物として奉じた。かくして、534年政変により一旦は中止された公主降嫁は、7年の歳月と紆余曲折を経て漸く実現の運びとなったのである。そして高歓はこの成婚を格別に重視した。即ち、公主の出発に際しては兼宗正卿元寿と兼太常卿孟韻の二人を使として晋陽まで送らせ、高歓自らは公主の持参品の選定にあたっただけでなく、遠く楼煩まで公主を送って蠕々の使者を手厚く慰勞するなどなみなみならぬ気の配りようであった<sup>(14)</sup>。

### 3. 蠕々国行人

ついで、541年の蘭陵公主降嫁後における蠕々の対東魏外交と安吐根の活動を辿ることとする。附伝は続けて次のように述べている。

吐根、性は和善。頗る計算有り。頻りに使して入朝し、神武の爲に親待せらる。其の本蕃に在りて人の譖する所と爲り、神武に奔投す。

まず、「頻りに使して入朝し、神武の爲に親待せらる」の一節に注目したい。これは、541年の公主降嫁以後も、吐根がたびたび行人として東魏に来たことを意味し、その頃事実上東魏を支配していた後の神武即ち高歓と親密の度を加えていったことを表わすものであろう。このことを事実即して検証するため、再び魏書及び北史の蠕蠕伝により両国の交渉を追ってみることとする。

公主降嫁によって友好関係が達成されると、阿那瓌は翌542年、孫女を隣和公主として、高歓の第九子長廣公高湛に妻せたいと請うて来たので、孝静帝は詔して結婚させることとした。そこで蠕々からは、郁久閼訶掘俟利・莫何の游大力の二人を使節として公主を晋陽に送ってきた。

その後、年々朝貢使を送ってきたが、さらに、阿那瓌に愛女があり公主と号していたが、高歓の権勢が日に高まるのを目のあたりにし、546年に意を決して愛女を高歓に妻せたいと申し入れてきた。これには、さすがの高歓もいささか逡巡するところがあったらしいが、夫人婁氏(後の武明皇后)及び孝静帝の勧めにより、遂に意を決して娶ることとした<sup>(15)</sup>。阿那瓌は大いに喜び、吐豆登郁久閼汗拔・姻姬(侍女?)らを派遣して公主を晋陽まで送り届けさせた。

このように幾重にも結ばれた通婚関係によって両国の友好はいよいよ固められ、その後北斉誕生の550年まで国境は平穏に、使者の朝貢が相ついだといわれる。先にも述べたごとく、吐根はこれらの朝貢のたびごとに「行人」として使節に随行してきたのであろう<sup>(16)</sup>。

### 4. 東魏帰国

数度にわたる東魏遣使により、高歓から信頼をよせられることになった吐根は、遂に東魏へ逃げ帰ることになった。附伝は、簡略にその次第を次のように述べている。

其の本蕃に在るや、人の譖する所と爲り、神武に奔投す。

ところで、文中「人の譖する所と爲る」とはどのような事実をさすのであろうか。

蠕々に限らず、遊牧騎馬国家において、例えば阿那瓌が行ったような中国化政策をとった場合、必ず遊牧民族の伝統を固執する保守派が反対者として登場する<sup>(17)</sup>。その場合、政策の推進者たる部族長ないし政策の顧問格にある中国人や西域人などが暗殺されたり、追放されたりすることは決して珍しいことではない。恐らく、彼の場合も何かと政策に参画していたであろうし、特に対東魏外交において大きな役割を果たしたことは、保守派の嫉視反感を買うに十分であったであろう。さらに憶測をすれば、彼に先んじて抑留されていた淳于覃は、なぜか反魏的姿勢をもって蠕々を教唆・扇動していた点において彼とは行き方を異にしていたので、覃との対立も考えられ、おるいはその一因であったのかも知れない。いずれにせよ、改革政策の中で彼の立場は微妙なところにあったと想像される。従って高歓との間に特別な信頼関係を築きあげていた彼にとっては、東魏への復帰が最も安全な生きる道であった。

さて彼の復帰を心から歓迎したであろう高歓は547年に没しているから、彼の復帰の年は546年か547年の初めごろということになろう。高歓亡きあとは子の高澄であるが、550年には齊王高洋が孝静帝の譲位により北齊王朝を樹てた。そして高洋（文襄帝）は、彼を「假設涼州刺史・率義侯」に任じ、さらに「儀同三司」として永昌郡幹を給するなど、その功労に充分報いようとした。「假設」とあるは、酒泉出身の彼にとって涼州刺史・率義侯が最も相応しいものであったが、涼州地域は既に西魏の支配下であって故郷に錦を飾ることはできなかつたからである。

さらにその後10年、皇建中（560～'61）儀同三司に「開府」（従三品）を加えて権貴の一員たることを許された。このような厚遇に対して彼も充分満足し、北齊朝に対する忠誠の念を終生失うことがなかったようである。このことは、以下において証明されるであろう。

## 5. 和士開追放計画

和士開は、もともと西域商胡の出身で、曾祖父の時代に北魏に来住した。即ち、出身及び中国来住の時期においては、安吐根と共通している。父安は中書舎人であったが、高歓に見出されて給事黄門侍郎・儀州刺史を歴任した。士開が恩倖として権勢が高まると司空公・尚書左僕射・冀州刺史を追贈され、文貞公の諡も与えられた。その子士開は、貴遊の子弟で、かつ生れつき聡慧であったから選ばれて国子学生となり、早くから頭角を表わすのである。しかし、彼は、出世の道を誠実に登ろうとせず持ち前の抜け目なさに加えて、時の天子武成帝（561～'65）がこよなく愛好した握槊及び胡琵琶を能くしたのを利用して帝に近づき、その側近として恩寵を独占する感があった。のちに武成帝は内外の政務について、ことごとく士開に相談するなど全幅の信頼を寄せ、やがては政務を士開に一任して遊樂に耽る始末であった<sup>(18)</sup>。565年武成帝が亡くなると緯が後主として即位するが、父帝の「顧託」として信任され、さらに胡太后の寵任をも受けて売官鬻獄をほしいままにし、その専権は目を掩うばかりであった。そこで趙郡王叡を中心に婁定遠・元文遙等が相謀って士開を追放する策に出た。三人はさらに任城王潛・馮翊王潤に段詔・安吐根をも誘っていよいよ実行に踏み切ることとした。このような機

密の厳守と慎重さが要求される危険極まる政治的策謀に吐根が当初より参画していたことは、趙郡王を中心とする正義派権貴の間においてかねがね信頼される存在であったことを物語るものであろう。

さて策謀は、胡太后が朝貴を集めて酒宴の会を開いた時を利用して行われた。叡がまず攻撃の口火を切り、土開の罪失を数えあげて次のように面詰した。

土開は先帝の弄臣にして城狐社鼠なり。貨賄を受納し、宮掖を穢亂せり。臣等義として口を杜  
ざす無く、冒すに死を以て陳べん。

と決死の覚悟でつめよれば、胡太后は

先帝の在時、王等何の意ありてか道わざりしや。今日孤寡を欺かんと欲するや。但、酒を飲み、  
多言する勿れ。

と制止したので叡は言葉も顔色もいよいよ厳しく、ついで吐根が激しくまくし立てた。

臣は本 商胡なり。諸貴の行末に在りて既に厚恩を受くるを得たり。豈、敢えて死を惜しまん  
や。土開を出さずんば朝野定まらず。

北斉王朝に対する赤心と君側の奸を憎悪する気迫が感じられる<sup>(19)</sup>。

結局、この事件は、胡太后の取りなしで一旦は幕を閉じたものの、和土開の奸智を弄した捲き返し  
工作が功を奏した。その結果首謀者の趙郡王叡のみ「不臣」の故を以て死刑に処せられ、他は地方へ  
降格転出されて終わった<sup>(20)</sup>。この際、吐根がどのような処分を受けたかは明らかでないが、処刑だけ  
は免れて、引続き忠勤を励んだものと思われる。

## 6. 北斉の滅亡と死

これより後に吐根の名が現れるのは、576年北周の猛攻の前に北斉軍がもろくも敗れて滅亡したとき  
である。

この年の12月、北周軍が平陽（山西・大同付近）に逼ったとき、後主は天池で校獵していた。急を  
聞いて早々に平陽城に帰り、重臣と最後の作戦会議を開き、出でて戦うべきか、退いて守るを利とす  
るかを問うた。右丞相の高阿那肱は、兵数は一応充足しているが、戦闘能力において到底神武創業時  
の軍の半ばにも及ばないから、戦わずして要衝高梁橋を守るのが良策であるとした。これに対し、会  
議に参画していた吐根は、激しい口調で攻戦論を唱えた。

子賊を一把し、馬上に刺取して汾河の中に擲たんのみ。

このように守戦論と攻戦論が真向から対立する中で後主はいずれとも態度を決しかねたが、結局は、  
内参達が、「遠来の軍を迎えて守戦に立つのは自軍の弱さを敵に示すもので潔しとしない」という意見  
を強く打ち出したので後主も遂に意を決して攻勢に出ることとした。しかし戦局は北斉軍に有利に展  
開せず、最高指揮者たるべき高阿那肱自身がすでに北周へ内通する意志を固めていたようで<sup>(21)</sup>、平陽  
を棄てて鄴都で最後の抵抗を試みたが、この段階で自ら北周軍に投降し、後主も擒えられてここに北  
斉は建国以来7主27年にして亡びた。戦闘中の吐根の行動は記録には残らず、附伝は終りに「齊亡ぶ  
年、卒す」とだけ記している。おそらく絶望的な戦いの中で北斉への孤忠を守って波瀾に富んだ生涯  
を終えたのであろう。

## 結 語

私は年来、ソグド系帰化人に関心を寄せてきたが、その特異な例として南朝へ来住した何氏について本誌第14集に紹介した。従って今回は北朝一本来来住者の数においては南朝よりはるかに多かったと推定される一の例について採りあげた。曾祖父の中国帰化—国際的貿易都市酒泉での誕生と成人—北魏から蠕々への遣使—抑留—蠕々の行人として東魏へ再三の遣使—東魏への帰国—北齊への忠誠—死という生涯は帰化ソグド人の中でも波瀾に富んだもので、特異な典例として関心を深くするものであった。さらにまた、北齊最後の段階において、権臣をはじめとして北齊と運命をともしにするだけの覚悟をもったものが少ない中であって、安吐根の生き方は、もとは帰化人でありながら、三代を経て意識においても中国人と化していたことを物語るものとして注目されてよいのではなかろうか。

しかし、僅かに附伝があるのみで、その他は断片的な史料しか得られず、空白の部分は時代的背景の中で推測する方法をとらざるをえなかった。粗漏ながら、このような形で公にして、諸先学の御叱正を乞う次第である。

最後に一言。本篇脱稿後、伊瀬仙太郎先生には御多忙のところ貴重な時間を割いて御閲読いただき、二・三の点について適切な御意見をお寄せ下さった。本来ならば、再考し加筆したうえで公にすべきであるが、提出期限が迫っていたのと筆者の力不足の故に残念ながら果しえなかった。このことについては、引続き「西域帰化人研究その4」を現在構想しているので、その中で御教示の点をできるだけ考慮してまとめることとしたい。一言申しあげてお詫びとお礼に替えさせていただく次第である。

## 註

- (1) 桑原隲藏：「隋唐時代に支那に来住した西域人に就いて」（内藤博士還暦記念東洋史論叢）  
「東洋文明史論叢」（P 349～351）所収  
姚 薇 元：「北朝胡姓考」（P 382～385）  
蘇 慶 彬：「兩漢迄五代入中國之蕃人民族研究—兩漢至五代蕃姓録」（P 337）  
後藤 勝：「西域胡安氏の漢化過程」会報7（P 39～40）岐阜県高等学校社会科研究会  
いずれも安国（ボハラ）から中国へ帰化した西域胡の一人として指摘したに止まる。
- (2) 魏書卷102西域伝粟特國（Sogdiana）の条に「其国商人，先多詣涼土販貨。」とあり、また洛陽伽藍記卷3に次のように述べている。  
北夷來附者，處燕然館，（正光）三年以後，賜宅歸德里。東夷來附者，處扶桑館，賜宅慕化里。西夷來附者，處崦嵫館，賜宅慕義里。自葱嶺巴西，至於大秦，百國千城莫不款附。商胡販客，日奔塞下。所謂盡天地之區已，樂中國土風因而宅者，不可勝數。是以附化之民，萬有餘家。
- (3) 蠕蠕（魏書・北史・南史・通典）は、このほか茹茹（周書・隋書）・芮芮（宋書・南齊書・梁書）・柔然（魏書・北史）・蜃蠕（晋書）とも記されているが、異字音訳で、本稿では蠕々に統一して用いる。
- (4) 北周書卷50突厥伝  
其後曰吐門，部落稍盛。始至塞下市糴絮顯達中國。大統十一年，太祖遣酒泉胡安諾槃陁使焉。其國皆相慶曰，今大國使至，我國將興也。
- (5) 魏書卷103高車伝  
（太和）十四年（490），阿伏至羅遣商胡越者至京師，以二箭奉貢。云，蠕蠕爲天子之賊，臣諫之不從。遂叛來至此而自豎之。當爲天子討除蠕蠕。
- (6) 洛陽伽藍記卷3

正光元年(520)蠕蠕主郁久閭阿那肱来朝。執事者莫知所處。中書舍人常景議云、咸寧中、單于來朝、晉世處之王公特進之下。可班那肱蕃王・儀同之間。朝廷從其議、又處之燕然館、賜宅歸德里。

- (7) 魏書卷91卷蠕蠕伝阿那壞の条、正光2年正月の条に克明に記載されている。武器・武器・衣服・各種食料・家畜類など種類・数量ともに夥しい数にのぼる。

当時、蠕々は、西方の吐谷渾を介して南朝と友好関係を保ちつつ、北魏を夾攻する態勢にあった。従って国内に不安定な要素をかかえている魏にとっては、ともかく蠕々との友好関係を打ち立てることが当面の重大事であった。そのような認識が、このような莫大な贈物となったと解される。

なお、南朝(梁)を軸に吐谷渾・蠕々・高句麗・百済が北魏を包囲する態勢にあったことは、和田博徳氏が提唱され(a)、坂元義種氏も同様な見解を開陳された(b)

(a) 「吐谷渾と南北朝との関係について」史学25—2

(b) 「倭国王の国際的地位」—五世紀の南朝を中心として「古代東アジアの日本と朝鮮」所収(P. 524~41)

さらに鬼頭清明氏は、このように南朝を軸とする対北朝包囲体制は次の時代にも継承され、「陳を中心として吐谷渾・高句麗・突厥を含む封鎖連環の同盟が存在したか」あるいはそれに近い状態があったと推断されている。

堀敏一氏(c)はこれらの見解に対し、否定的であるが、筆者も同盟の存在までは指摘できないと思う。

(c) 「隋代東アジアの国際関係」唐代史研究会「隋唐帝国と東アジア世界」(P. 118)

- (8) 孝昌元年(525)沃野鎮民破落汗拔陵の叛乱に際し、衆10万を率いて戦って、大功をあげ、宴勞班賜された。また武泰元年(528)北鎮叛民杜洛周の乱にあたり、定州刺史楊津の泣請により、精騎1万を送っている。なお、これと併行して、525年10月及び528年正月に遣使朝貢している。

- (9) 魏書蠕蠕伝建義初年(528)の条に

夫勲高者賞重、徳厚者名隆。蠕蠕主阿那壞鎮衛北蕃、禦侮朔表、遂使陰山息警、弱水無塵、刊跡狼山、銘功瀚海、至誠既篤、勲緒莫酬。故宜標以殊禮、何容格以常式。自今以後、讚拜不言名、上書不稱臣。

- (10) この事件に関する魏書の記述は散佚して後に補ったものか記述が簡略にすぎ、経緯や年代が明確でないので、北史に拠ることとした。なお、次の二著を併せ参考にした。

(a) 内田吟風「柔然時代蒙古史年表」東洋史研究8—5・6, 9—1

(b) 中国科学院(歴史研究資料叢編)「柔然資料輯録」中華書局1962

なお、(a)は、安吐根の記事をとりあげていない。(b)は、附伝の前半を二つに分け、それぞれ、533年・540年にあてているが、賛成できる。ただし後半の記述については、言及されていない。

- (11) この時点で阿那壞の立場は、後の突厥他鉢(略)可汗の北齊・北周に対する立場と全く同じである。

俟斤死。弟他鉢可汗立。自俟斤以來、其國富彊、有凌轢中夏志。朝廷既與和親、歲給繒絮錦綵十萬段。突厥在京師(長安)者、又待以優禮、衣錦食肉者常以千數。齊人懼其寇掠、亦傾府藏以給之。他鉢彌復驕傲、至乃率其徒當曰、「但使我在南兩箇兒孝順、何憂無物邪」。

- (12) 周書卷50蠕蠕伝

- (13) 北史卷13文帝悼皇后郁久閭氏及び文帝文皇后乙弗氏に詳しい。ただし、その通婚は、蠕々の侵寇に悩まされた宇文泰が、友好関係を築かんがため、阿那壞の長女を迎えたもので、そのため文皇后乙弗氏に出家までさせている。しかし事はそれだけで終らず、以下のような不幸な結末となった。

時新都關中、務欲東討、蠕蠕寇邊、未遑北伐、故帝結婚以撫之。於是更納悼后(阿那壞長女)命后遜居別宮、出家爲尼。悼后猶猜忌、復徙后秦川、依子秦州刺史武都王。帝雖限大計、恩好不妄、後密令養髮、有追還之意。然事祕禁、外無知者。(大統)六年春(540)蠕蠕舉國度河、前驅已過夏、頗有言虜爲悼后之故興此役。帝曰、豈有百萬之衆爲一女子舉也。雖然、致此物論、朕亦何顔以見將帥邪。乃遣中常侍曹寵手敕令后自盡。后奉敕、揮淚謂寵曰、願至尊享萬歲、天下康寧、死無恨也。因命武郡王前、與之決。遺語皇太子、辭皆悽愴、因慟哭久之。侍御咸垂涕失聲、莫能仰視。召僧設供、命侍婢數十人出家、手爲落髮。事畢、乃入室、引被自覆而崩。年三十一。

このような文皇后の悲惨な死が、悼皇后の突然の死を招いたという。悼皇后伝は次のように記している。

(大統)四年正月(538)、至京師、立爲皇后。時年十四。六年(540)后懷孕將産、居于瑤華殿、聞上有狗吠聲、心甚惡之。又見婦人盛飾來至后所、后謂左右、「此爲何人」醫巫傍侍、悉無見者、時爲文后之靈。又産訖而崩、年十六。いくらかの潤飾はあるにしても、当時における蠕々の圧力がいかに強大であったかを察知できる。

このように、北朝と蠕々との間の公主の交換は、漢と匈奴、隋と突厥、唐と回鶻の間に行われた中国王朝から胡族国



家への公主降嫁とは全く性質を異にするもので、布目潮風氏は、特に次の二点を強調されている。

1. 相互互換的で、北朝から蠕々・突厥へ公主が出嫁するとともに、北朝へも皇后・公主を送り込んでいること
2. 両者の関係は、全く対等であること、あるいはむしろ北族側から皇后を出すことによって北朝へ重圧を加えている感すらあること。

「隋の大義公主について」—隋唐世界帝国の指標としての「和蕃公主」

「隋唐帝国と東アジア世界」所収（P. 297~300）

- (14) この時、魏収も公主を見送り、「出塞」及び「公主遠嫁詩」の二首を詠じ、祖珽も和し、時人の伝詠する所となったという。（北齊書卷39祖珽伝）
- (15) 北齊書卷9 神武明皇后安氏伝に  
神武逼於茹茹，欲娶其女而未決。（明皇）后曰、「國家大計，願不疑也」。及茹茹公主至，后避正室處之。神武愧而拜謝焉。曰、「彼將有覺，願絕勿願」。なお、北史卷14蠕々公主伝及び封城太妃余朱氏伝にもある。
- (16) 蠕々の朝貢使節の代表は、可汗家である郁久閼氏や莫何という高官（役職不明）にあるものを任じていたようで、安吐根はそれに比すれば、勿論低い地位にあったのは当然で、それ故に使者としては名前が出ていないのであろう。因みに莫何「去汾」の名は477年・520年と二度出てくるが、前者は「去汾比拔」とあり、後者は「去汾」とだけ記してある。従って同一人とすれば随分長い間この要職にあったことになるし、去汾を姓と考えれば「莫何」の職は有力氏族去汾氏に世襲されていたものと考えられよう。
- (17) 魏書卷1序紀第一に次のような記述がある。

文皇帝（沙漠汗）は、国太子として洛陽に学んだが、天資英邁にして晋人も敬するほどであった。277年、帰国するや、始祖力微はこれを喜び、群臣を会して宴を行った。そのときのことを次のように述べている。

酒酣，帝仰視飛鳥，謂諸大人曰，我爲汝曹取之。援彈飛丸，應弦而落。時國俗無彈，衆咸大驚，乃相謂曰，「太子風彩被服，同於南夏。兼奇術絕世，若繼國統，變易舊俗，吾等必不得志。不若在國諸子習本淳樸」，皆以爲然。且離間素行，乃謀危害，並先馳還。始祖問曰，我子既歷他國，進德如何。皆對曰，「太子才藝非常，引空弓而落飛鳥。是以得晋人異法怪術，亂國害民之兆，惟願察之」。

結局、力微の期待も空しく諸大人に謀殺された。

北魏孝文帝の洛陽遷都の場合は表面化しなかったものの、強い反対は当然予想される場所であったので、南齊討伐を名として強行した。魏書卷53李冲伝は次のように言うている。

高祖初謀南遷，恐衆心戀舊，乃示爲大舉，因以脅定群情，外爲南伐，其實遷也。舊人懷土，多所不願，内憚南征，無敢言者。於是定都洛陽。

- (18)(19) 北史卷92恩倖和士開伝に詳しい。

- (20) その事件については、その後の展開について附記しておく必要がある。

奸策を弄して危機を乗り切った士開は、武平元年（570）淮陽王に封ぜられ、尚書令となった。再び勢威が高まるにつれて富商大賈は朝夕門を填め、廉恥を知らざる者が競って阿附し、中にはその「假子」となって庇護をうけ、市道の小人も財物の寄進によって昆季の行列に並ぶ有様であった。かれまた之に乗じて貨財を聚斂して恥ずるなく、甚だしきに至っては、刑死直前の者からも財物を責取して免罪する（これを「贖命物」と称したという）有様であった。そこで武平2年（571）琅邪王儼を中心に、領軍大將軍庫狄伏連・侍中侍中馮子崇・（治）書侍御史王子宜武衛大將軍高令洛が相謀って7月25日、彼が入台するところを侍伏せて首を刎ねた。

しかし、今回も主謀者に対する処分は厳しく、琅邪王儼は謀殺され、庫狄伏連も斬られた。後主は、度重なる誅殺事件に対し「哀悼不視事數日」であったが、日がたつにつれて士開への「追憶不息，詔起復其子道盛通直散騎常侍，又敕其弟士休入内省，参典機密。詔贈士開假黃鉞・右丞相太宰・司徒公・録尚書事，諡曰文定」という有様で綱紀の肅正などとても覚束ない状態であった。

なお、琅邪王の謀殺計画に安吐根が参画したかいなか残念ながら記録には見当たらない。

- (21) 北周侵攻時における高阿那肱の行動には内通を思わせる節がいくつかある。

1. 軍士雷相なる者が「阿那肱遣臣招引西軍，行到文侯城，恐事不果，故還聞奏」と報じたが取りあげなかった。
2. 阿那肱の腹臣が、彼の謀反を告げたが、虚妄として斬られた。
3. 北周軍の侵攻を前線より何度も報じたが、「周軍未至，且在青州集兵馬，未須南行」として取りあげず、北周軍が最後の抵抗地濟州関に来襲するや、あっさり降服している。

そしてこれらのことが次第に人の噂となり、遂に「(時人皆云) 那肱表款周武，必仰生致齊主，故不速報兵至，使後主被擒」と世人は評するに至った。なお、彼は北周に降ってから、大將軍を授けられ、郡公に封ぜられ、出でて隆州刺史になった。しかし周隋革命の際には(581)蜀地に拠った王謙の下に走って楊堅に反抗したが、鎮定され誅殺された。